



専門的職業（プロフェッション）

としての教育

蠟山政道

この題目を選んだ動機は二つある。とくに幼児教育に、これが適しているかどうか、じゅうぶんな知識がないので、はっきりしたことは言えないが、あらゆる教育に通じる問題として考えてみたいと思つたのである。

第一に、昨年九月、勤務評定反対の問題がおこつたおり、これを、なんとか解決したいと思ひ、文部省と日教組の仲介を試みたが、これは成功しなかつた。その際、次のようなことを感じたのである。すなわち、もし教育というものが専門的職業（本質的にそうであると思ふが）として認められていゝるならば、当然、勤評といつた行政的問題は、行政側と教育

者との間で話し合いがなされるはずである。Consultationがあつてしかるべきである。このことは、例えば、健康保険法における医師団体、あるいは弁護士会法における弁護士は法律上、一定の職業的地位と権利を認められており、したがつて、当該職業に関係ある事項について立法がおこなわれるときは、前もつて、かならず相談を受けていることからみても明きらかである。しかるに、今日、教員は専門的職業としての地位を認められておらず、また教員自身も、労働組合を組織して、自らその地位を拒否している。さらにまた一方では、地方公務員法によれば、教員は公務員、すなわち国家

または公共団体の被備者という考えが背後にあり、したがって、まったく一般の行政職員と同じ扱いを受けるわけで、地方の職員組合との話し合いは文部省としてはできないとされたのである。このようなことから考えてみても、もし、この専門職業としての教育が確立されていたら、教育の混乱に、解決の方途が見出されるであろう。今日のような状況は、さまざまな理由もあろうが、教育にとって、また教育界にとっても困ったことである。で、理由はいずれにせよ、専門としての教育が確立されねばならないと考えていたのが、一つの動機である。

もう一つは、とくに幼児の教育に関係のあることであるが最近、ある雑誌に「女子大学という幼稚園」という記事があった。が、「女子大学が幼稚園である」とは、結構なことと言うべきか、反駁すべきか。この場合の幼稚園とはどういうものか考えてみたい（幼稚園教育に従事している人が、どう考えているか、知りたいものだが）と思った。逆説的かもしれないが、私は女子大学は幼稚園であるといつて差しつかえない、と思っている。

第一の問題に対する結論は、——専門職業としての教育を考えることは正しい。それが、社会からも国家からも認められるなら、教育は根本的に変わるであろう。今日の教育行政は、教育をプロフェッションとして認めていないところから問題が生じる。では、いかに、これを確立するか。

まず、教師は、誰にでもわかる意味において良い先生でなければならぬ。能力のある先生、正しい先生でなければならぬ。これらは、いずれも個々の先生の問題である。一方教師の理想像の問題が教員養成のための教育に存しなければならぬ。具体的には、第一に、専門職業についての知識を持ち、学問があること（しかし、学問があっても、学者や研究者は教師ではない）。第二に、職務が好きである——好きこそ、ものの上手なれ——。第三に、教育の対象たる子どもが好きであることが必要だと思ふ。くり返しになるが、学者や研究者は、かならずしも学生が好きであるとは限らない。これは、あらゆる種類の教師にいえることであるが。

しかし、以上の条件だけでは、教育がプロフェッションとして成立するかどうか疑問である。こういう資格を持った人

が、社会的に認められねばならないし、こういう人たちの組織する団体が、社会的に認められることが必要である。このようなきまぎまの職業集団が相寄りて作られる社会こそ民主的社會であると考える。しかし、この集団が社会的に認められるか否かは、ひとえに、その集団自体の働きにかかっているのである。前述の教師についての三条件を備えた人たちは、社会から尊敬され、その発言は尊重されるであろう。したがって、以上の三条件を備えることが先決であると思う。

さらに教育は、社会にとって大切なもの、すなわち、人間の成長・陶冶に関係する教育は、医学や法律と同じく、またはそれ以上に、社会にとって必要である。その教師が構成する団体が社会的に認められる時はかならずやくるであろう。今日は、社会にも多くの問題はあがるが、まず教員自身が条件を備えるべきで、あとは時間の問題であり、決してこの逆ではないのである。

第二の幼稚園教育について、私の好きな伝記の一つに、フレーベルの「自叙伝」があるが、そこで、なるほどと思った一節は、フレーベルが、一八〇七年頃——その前年に彼は

スタロッチを訪問しているが——家庭教師をしながら、教育者としての自覚を得た箇所である。

「私は、私の人間生活の幼児期を眺めたり回顧したりしてその時期から学ぶと同様に、今や私の教育者の生活と活動との幼児期を眺めてその時期から学ぶのである」(『フレーベル自伝』長田新訳、岩波文庫、一〇〇頁)。彼は、科学者として自然観察をし、多くの子どもからその心理や行動を観察すると共に、彼自身の教育者としての幼児期について考えたのである。一八〇七年といえば、ドイツはナポレオンの支配下にあつて、プロイセンの人びとは国民解放の意識をもち始めた頃であり、有名な哲学者フイフテの「ドイツ国民に告ぐ」の時代でもあつた。このような時期にあつて、彼は、幼児教育の原理と、教育者としての幼児に対する理解と愛情を結びつけたものと思われる。この職業に関する知識と対象とが結びついたそこにこそ、教育の意義があり、フレーベルの教育原理が世界各国に広まり、今日なお盛んな理由であらう。

また、ジョン・デューイ著『学校と社会』(宮原誠一訳、岩波文庫版・青二七二)第五章「フレーベルの教育原理」に、次

のようなエピソードが書かれている。

シカゴ大学付属小学校が創設された一八九六年（日清戦争直後）、デューイは、シカゴ大学に招かれ、実験学校を始めた。先生二人、生徒十六人で、大学の近くの民家を借りて、やり始めた。ちょうどその頃、ひとりの婦人が幼稚園を参観したいと訪ねてきた。ところが「ここには、まだ幼稚園の施設はない」ときかされて、「では、こちらでは、唱歌とか図画とか、手工、遊戯、劇あるいは子どもたちの社会訓練などはないのですか」と尋ねた。「それは、ここにもありません」との返事に、その参観人は、「それなら幼稚園ではありませんんか。私の考えでは、それが幼稚園であって、ここに幼稚園がないとおっしゃったのはどういふつもりですか」といったそうである。この参観人のいう意味、すなわち、社会生活の訓練の場という点からは、教育の一貫したもの、小学校も、いや大学までも含まれてしまうであろう。

今日の女子大学においても、私どもは、ここにいう幼稚園の意義も完全に実現しているとはいいがたい。今日、大学卒業生が社会に出て、ただちに立派な市民となりうるかどうか。

か。考えてみれば、これはまだ幼稚園教育の続きであることは明きらかである。

「女子大学という名の幼稚園」といった記事が書かれるのは、一つは、そんな題にすれば、雑誌がよく売れるというところであるが、書いた人自身、少しも幼児教育の重要性など理解していないのではないか。さらに、こういう記事を喜んで載せたがる低級な商業雑誌がはびこるのは、つまるところ教育のいき届かない証拠である。

一貫した教育原理が、歴史的にみて、幼稚園に始まったということは決して偶然ではない。というよりは、すべてが幼稚園教育から始まっているとも言えよう。幼稚園教育もまた、大学教育と同じである。それに従事する人びとは、文部省や政党に対して、力をもって対抗するのではなくして、個人の教育という職業に従事し、生きるという、そのことによって社会的信用をうるのである。

こういう点から考えて、女子大学が幼稚園だといわれた機会に、教育の意義と教育者の立場について考えてみた次第である。

（教育実地指導研究会講演 お茶の水女子大学長）